

アメリカン・ボード日本ミッション宣教師の「越境」伝道

——一九世紀末期日布間の宣教師ネットワークとハワイ日本人移民

吉 田 亮

はじめに

海外伝道団体及び宣教師の活動は一国の領土、政治体制、文化のコンテキスト内に収まりきらない。海外伝道団体は複数国家や地域に蜘蛛の巣のようなネットワークを形成し、世界規模の活動を展開してきたからである。宣教師ネットワークを類型化するならば、以下のようなことになる。A型は、伝道団体本部を起点として、多くの場合、二国家や地域に分かれて存在する本部と伝道地ミッション間、及び

一伝道地内の複数教派ミッション間を結ぶネットワークである。B型は、ヒト、物、資本、情報の国際移動に伴って、伝道団体や宣教師が一国家内の伝道地を越えて形成するネットワークである。アメリカン・ボード日本ミッションの活動を二タイプに分類したのが図1である。

本稿ではB型を事例として採り上げる。海外宣教師は常に一赴任国で引退まで滞在するわけではなく、国家や地域の再編や、複数国家や地域間のヒトの移動によって、伝道地域が一国枠を越えて広が

A

- ① 伝道地（国、地域）と宣教団体本部 ↓ 日本ミッシン ⇄ アメリカン・ボード本部
- ② 伝道地内のミッシン・スーパージョ ↓ 日本ミッシン ⇄ 各地スーパージョ
- ③ 伝道地内の教派間 ↓ 聖書翻訳のための教派間委員会
- ④ 伝道地間 ↓ 日本ミッシン ⇄ 北中国ミッシン

B

- ⑤ 日本帝国植民地 ↓ 現地日本ミッシン支部 ⇄ 他派ミッシン
- ⑥ 海外移民地 ↓ 現地日本ミッシン支部 ⇄ 現地国内伝道団体

図1 宣教師のネットワークの形態 アメリカン・ボード日本ミッションの例

り、複数国家や地域にまたがることもある。海外移民伝道に赴任する宣教師は典型例である。来日アメリカ宣教師の例で考えてみよう。日本に赴任した宣教師は通常、退職するまで日本の住民を対象とした伝道を行う。例外的に赴任国が代わることがあるが、多くの場合はミッションや宣教師個人と伝道団体本部との関係で決定されることである。しかし、海外移民伝道の場合は、赴任地である日本の住民が例えばカナダに移民することによって、来日宣教師の伝道地が一国の領土を越えてカナダにまで拡大する。宣教師は複数国家にまたがる伝道活動を行うことになる。宣教師が単に他国に空間移動するだけのことではない、多種の政治や文化を体験し、それを踏まえた伝道活動を行うのである。日本人移民の目的地がアメリカ宣教師の祖国である合衆国の場合でも、帰国して祖国の住民に伝道活動をするのとはわけがちがう。日本の宣教師として、合衆国に移民した日本人を重視する伝道活動を行うことを第一義とするので、宣教師は合衆国と日本人移民との狭間にあつてマージナルな体験をし、政治的、文化的に祖国にのみ同一化できない複合的なアイデンティティを形成する。日米両国家の影響下にある日本人移民が生き残りのために苦悩すればするほど、宣教師は日本人移民に深く「共感」するようになるのは当然である。さらに、日本人移民は特定国だけに向かうのではなく、北米、中南米、東アジア、満洲、南洋、オーストラリアと世界中に拡散していったために、宣教師の活動範囲が三

伝道地以上にまたがることもある。合衆国の日本人がブラジルや満洲に転移民することすらある。日本ミッションの場合、合衆国、朝鮮、南洋に移り住んだ日本人への伝道活動に関与した。宣教師の活動は、伝道本部のある合衆国、日本ミッションの拠点がある日本、そして伝道地のあるひとつ以上の日本人の海外居住地を結ぶネットワーク内で重層的に展開されることになる。

海外移民伝道に携わる宣教師の複合的な経験やアイデンティティ形成は一国史研究の枠を越えていると言えよう。しかし、従来の研究は宣教師の活動を国境で分断し、それぞれの一国史の中でのみ論じてきた。国家によってぶつ切りにされてしまっても宣教師の活動について語れることは確かであるが、宣教師の「越境」活動の全貌を明らかにしたとは言えない。宣教師の視点から活動の全体像を解明するには、一国史から「越境史」へのパラダイム転換が必須である。「越境史」的視点は宣教師研究のみに限って有効であるというわけではない。アメリカ史研究では一〇年以上前から「越境史」(Transnational History)に注目してきた。^①グローバリゼーションの影響を受けて、国家的な枠組みでアメリカ史を説明する限界が出てきたのである。従来の歴史研究に浸透する国家中心主義や「例外主義」^②を克服するための一視点として、「越境史」が提唱されるようになった。「越境史」は世界史の中で自国史を捉える視点であり、越境的、国境交差的な理念、制度、組織、ヒトの視点を取り入れた

アプローチ方法である。経済関係、奴隷制度、諸分野の運動や組織、理念や政策、移民やディアスポラなどのトピックで、「越境史」的研究の成果があがりつつある。³⁾ 本稿で採り上げる海外宣教師や移民はその代表例であるといえる。

宣教師による日本人移民及び植民伝道を扱った研究を大雑把に分類すると、元日本宣教師の日本人移民問題への政治的関与、⁴⁾ 日本宣教師や伝道団体による日本人植民伝道、⁵⁾ 元日本宣教師及び元外国宣教師によるハワイを含む北米日本人移民伝道となる。⁶⁾ いずれも一國史の枠組み内の研究としては個別テーマを深く掘り下げたものばかりである。本稿はこうした先行研究の成果を踏まえながらも、移(植)民地での宣教師の活動と日本伝道との相互関係の考察を加えることで、より重層的な宣教師研究とすることを課題としている。

本稿で事例として扱うのは、一九世紀末期に日本人がハワイに移民したことによって形成された日本とハワイ間を結ぶ宣教師ネットワークであり、そこでアメリカン・ボード日本ミッション宣教師が展開した「越境」伝道である。「越境」伝道とは何か。シラー(Nina Gluck Schlier)は「越境移民」(Transmigrants, Transnational Migrants) 研究の成果に基づいて、「越境性」(Transnationality) の四つの特色を提示している。⁷⁾ まず、複数国家や地域間に経済的、政治的、社会的、宗教的、血縁的、文化的ネットワークを構築し維持する。次に、複数国家や地域に対して複合的な忠誠心や帰属性を示

す。さらに、複数の文化を習得、複合的アイデンティティを形成する。最後に、そのプロセスの結果として複数国家や地域に対して実質的な影響を及ぼす、である。本稿では「越境性」の特性を踏まえて、「越境」伝道を「複数国家や地域間を結ぶキリスト教ネットワーク内で、複合的な政治的及び文化的アイデンティティを示しながら、複数国家や地域に対して影響力を及ぼす伝道活動」と定義する。⁸⁾ 以下、日本とハワイ間の宣教師ネットワーク形成の背景、ネットワーク形成過程、「越境」伝道について順次考察し、最後に「越境」伝道の意義を述べる。

1 アメリカン・ボードのハワイ及び日本伝道

アメリカン・ボード(American Board of Commissioners for Foreign Missions, 以下ABCFMと略す)は一八一〇年にボストンに設立された合衆国最古の海外伝道団体である。プロテスタント教会としては古参の会衆派及び長老派を中心とした教派協力団体として出発したが、後に神学的な対立から長老派の一部が離脱し、七〇年代頃からは会衆派中心の組織となった。⁹⁾ ABCFMによるハワイ伝道(当時はサンドイッチ島伝道と呼んでいた)は一八二〇年に始まった。¹⁰⁾ 西インドのマラタ、セイロンに次ぐ、第三番目の伝道地である。伝道活動では現地ハワイアン¹¹⁾の改宗と「文明化」を重視し、特に学校教育活動を充実させていった。本来、キリスト教伝道的手段として

の「文明化」であったが、いつしか手段が目的になってしまったため、サンドイッチ島ミッションはABCFM本部の批判にさらされた。その後、ABCFMは海外伝道全体の方針を見直し、「アンダーソン主義」と呼ばれる、伝道と「文明化」の分離、現地人主導を特色とする政策に転換した。その結果、サンドイッチ島ミッションは一八五三年にABCFMから独立し、翌五四年にハワイアン・ボード（Board of Hawaiian Evangelical Association, 以後HEAと略す）を設立した。HEAはハワイ諸島の伝道を担当する国内伝道組織であり、ハワイアンだけでなく、一八八二年からは中国人移民、一八八八年にはポルトガル人移民への伝道も開始した。

ABCFM本部はハワイの伝道を担う宣教師を、チームを組んで数回に分けて現地に派遣した。ピーター・ギュリック（Peter Johnson Gulick）とフアンニー・ギュリック（Fanny Hinckley Thomas Gulick）夫妻は第三回の伝道団の一員であった。彼らの次男が日本及びハワイの日本人移民伝道に関与したオラメル・ギュリック（Oramel H. Gulick, 一八三〇—一九二三）である。オラメルは伝道巡回船モーニング・スター（Morning Star）号に乗船して南太平洋伝道に従事し、その後ハワイアン女学校校長に就任した。そして一八七一年、グリーン（D. C. Greene）に次ぐ二人目のABCFM宣教師として来日したのである。

一方、ABCFMの日本伝道は一八六九年、グリーン来日を嚆矢

とする^①。日本では既に聖公会、長老派、改革派が関東を中心に伝道基盤を固めていたので、教派競合を回避するために、グリーンは関西に拠点を置いた。七二年に日本ミッションを組織し、京阪神を中心に全国に活動規模を拡大していった。既述のように、ABCFMでは、ハワイ伝道の反省から「アンダーソン主義」が伝道方針として定着していた。日本伝道においても七〇年代は、福音伝道を第一とし、「文明化」を担う教育活動を副次的な手段として位置づけ、現地伝道者を訓練して、宣教師やミッションから自給独立を達成した日本人教会を設立することが目標となっていた。しかし、八〇年代には「アンダーソン主義」は非実際的なものとなり、代わって「文明化」、特に高等教育に力点を置く政策への転換を、ABCFM本部は検討し始めた。ABCFMの海外伝道情勢の変化と、日本伝道の個別事情が路線変更を生んだのであった。まず、七〇年代以降、世界情勢が変化し、ABCFMが伝道拠点をもつ諸国で「西欧化」が顕著となり、もはや「文明化」を軽視した伝道活動は有効ではなくなった。次に、日本では「西欧化」が特に顕著に現れていた。宣教師達は、旧来の方針では「近代国家」建設のために急激な「西欧化」過程を突き進んでいる日本人のニーズに合致しないことを、早い段階で察知していた。伝道対象がエリート知識人層であったことも伝道方針変更を加速する一要因であった。日本人エリート層は時代の変化に敏感であり、「近代国家」の指導者となるためにいち早

く宣教師から「高度な西欧文明」を習得しようと先を争っていた。彼らのニーズに応じるために、宣教師は高等教育を基軸にした「文明化」活動に特化するようになっていった。高度な教育には財源確保が必須であったので、ABC FMは日本ミッションに対して、他ミッションに類例を見ない高額の資金援助を続けた。「文明開化」の時代が終わり、九〇年代以降のいわゆる「反動期」に入ると、キリスト教伝道を巡る状況は一変し、キリスト教は西欧列強の侵略の手先として批判的となったのである。キリスト教に入信したエリート層の大半は方向転換し、国家主義に「迎合」することで生き残りを図ろうとした。宣教師や外国伝道団体との関係を絶ち、日本の教会の自給独立を目指すというのは、対外的に自分達の姿勢を示すための有力な手法のひとつであったのである。

ABC FM日本ミッションの場合、一八七八年に日本人達は現地人伝道組織である日本基督伝道会社を組織し、ミッションの財政支援を得つつも日本人主体の伝道に着手した。続いて、一八八六年に日本組合基督教会を設立し、教会形成における主導権も獲得した。以後、宣教師は日本人が設立した二団体の協力者として伝道活動に関与していくことになった。しかし、九〇年代になって、組合教会も例に漏れず、ミッションからの自給独立を提唱することになる。⁽¹²⁾一八九三年、組合教会総会は日本ミッションより財政支援を受けている教会（伝道教会）と自給している教会（独立教会）を区分し、

伝道教会を格下げすることで自給意欲を高めようとした。⁽¹³⁾二年後の九五年、組合教会第一〇回総会は「日本基督伝道会社はアメリカンボード[▼]従来の指定寄付金を謝絶する」決議をおこない、翌年実施した。但し、伝道教会代表からは地方伝道の切り捨てであると猛反対があったので、伝道教会が自給できるように伝道会社が援助することになった。この決定の背景には、日清戦争によるナショナリズムの高揚、日本の教会独立や新神学を巡る日本人と宣教師の意見対立があった。組合教会と宣教師との関係については、両組織の代表が協議した結果、九八年の第一三回組合教会総会で「本組合教会及アメリカンボード宣教師等は従来の交誼を持続し且つ将来相補助して以て日本伝道事業の為に尽瘁せんと欲すること」を決議すること⁽¹⁴⁾で、両者が決裂するまでには至らなかった。⁽¹⁵⁾その煽りを受けて、一八九六年に同志社の運営方針を巡る宣教師と日本人との衝突から、宣教師が同志社から撤退し、九七年より同志社へのミッションの財政支援が途絶えた。同九七年にデイヴィス(J. D. Davis)等は、同志社に代わって独自に日本人伝道者を養成するために京都福音学館を設立した。⁽¹⁶⁾

日本ミッションは組合教会の自給独立運動を批判するのではなく、冷静に対応した。ABC FMに対しては、九五年に組合教会がABC FMからの財政的独立を決議した年度の日本ミッション年次報告書で「組合教会は国内伝道事業を独立させ、アメリカからは援助を

受け取らないことを決定した。これは全世界で事業を遂行しているボードの政策の線に直接沿っているが、過重な負担がかかる日本の若い教会の英雄的努力が要求されることである」と記し、組合教会の決定がABC FMの伝道活動に障害となったり敵対するものではなく、むしろその方針通りに行動していることを読者に印象づけようとしている。さらに同報告では日本が今後も有望な伝道地であることをアピールするために、組合教会とミッションの「協力関係は困難であり、日本の教会のいわゆる指導者との関係で大規模な中心地での事業に多くの障害があるが、田舎や小規模都市に向かっている宣教師のところには生命の言葉に熱心な聴衆が多く集まっている」と報じている。また組合教会会員に対しては、シドニー・ギューリック（ギューリック夫妻の孫、オラメル・ギューリックの甥 Sidney Lewis, 一八六〇—一九四五）が『基督教新聞』で二度にわたって「独立問題」について採り上げ、自給独立を支持する立場を表明した。¹⁸⁾

ギューリック夫妻は宣教師と組合教会との関係が悪化する以前の「良き時代」に日本で働いた。一八七一年に来日後、神戸滞在中に日本のキリスト教新聞の源流となる『七一雑報』を発刊したこと以外は表だった活動をしていない。むしろ地方伝道の充実に専心していた。八三年から二年間を新潟で、八五年から八七年まで岡山、そして八七年から九二年まで熊本で伝道活動に従事した。この熊本で

は、一八九三年に宣教師が関与していた熊本英学校の教師奥村楨次郎が教育勅語に対して「不敬」にあたる発言をしたために辞任させられる事件が起こった。さらに一八九四年には、熊本英学校及び女学校が宣教師を教師として雇用することを拒否したので、宣教師は撤退し、ステーションは解散を余儀なくされたのである。¹⁹⁾ 同年、ギューリックは日本人伝道部長としてハワイに赴任することになった。ギューリックは日本滞在中に兄弟や甥を日本宣教師として呼び寄せ、一種のハワイ・コネクションを作った。弟ジョン (John Thomas Gulick, 一八三二—一九二三) やセオドア (Theodore Weld, 一八三七—一九二四)、妹ジュリア (Julia A. E., 一八四五—一九三六)、兄ルーサー (Luther Halsey, 一八二八—一九二一) の息子ハリエット (Harriet Mitchell, 一八五六—一九二二) やシドニーである。親族を結集してまで日本伝道に対して情熱を傾けていたギューリックにとって、日本からハワイへの移動は重大な決断であった。

2 「越境」ネットワークの形成

日本とハワイを結ぶ宣教師「越境」ネットワークの形成を大きく規定したのは日本人のハワイへの移民であることはいまでもない。一八六九年にハワイに渡ったいわゆる「元年者」以来途絶えていた日本人移民は、一八八五年に「官約」移民として再開された。日本人移民はハワイの基幹産業である製糖業の労働力として、各島の砂

糖プランテーションに配置されていた。ハワイ現地のニーズや、送出国日本及び県の積極的な移民奨励、移民会社の斡旋が相乗効果を生み、ハワイの日本人人口は急増し、一九〇〇年にはハワイ全人口の四〇%を占めるまでに至った。日本人移民はハワイに「恵み」と「脅威」の両方をもたらした。経済的には日本人移民は基幹産業を発展させる労働力を提供したが、政治的には日本の「領土的野心」や日本人移民の保護を理由とした「干渉」というおまけも付いてきた。現地社会の指導層は日本人や日本の「侵略」からハワイを護るために、一八八七年に参政権取得制限、一八九四年に労働者移民入国規制など制度的な壁を設けることで、日本人の社会上昇を抑さえ込もうとした。

ハワイ社会から日本人移民に対して最初にアプローチをしたのは現地のキリスト教界を支配するH E Aであった。H E Aは現地を代表する受け入れエージェントとして、ハワイに上陸した様々な国の移民に対して伝道、教育、福祉活動をおこなった実績をもっていた。一八八五年に「官約」移民がホノルルに上陸すると、H E Aは日本人助手青木を通訳として使い、英語夜学校、日曜礼拝、文学会、音楽学校を開始した。しかし成果は上がらなかった。⁽²⁰⁾

別のルートからハワイの日本人移民にアプローチする団体があった。一八七七年設立のサンフランシスコにある邦人キリスト教組織である福音会であった。ハワイの同胞が異境の地で苦しんでいると

いう情報を入手した福音会指導者のひとり美山貫一は、一八八七年に単身ハワイに渡り、同胞への伝道を開始した。⁽²¹⁾ ホノルル総領事安藤太郎が美山の活動を全面的に支援したために短期間で大きな成果を上げた。特に、プランテーションで働く日本人労働者に対する煽風事業が功を奏し、多くの回心者を得た結果、一八八八年に日本人メソジスト教会がホノルルに誕生した。しかし、メソジスト派本部はH E Aとの教派競合を懸念してハワイへの参入を躊躇し、一八九一年に美山の伝道成果をH E Aに譲渡した。ところが、メソジスト派の日本人信徒がH E Aへの併合に抵抗し、カリフォルニアのメソジスト派年次総会に対して日本人伝道者を派遣するように上訴したために事態は急変した。一八九三年にメソジスト派は正式にハワイ伝道を公認し、日本人伝道者をサンフランシスコの日本人美以教会から送り込んだのであった。日本人移民伝道はH E Aとメソジスト派の競合をハワイにもたらしたことになる。

H E Aはメソジスト派の動向を睨みながら日本人移民伝道のための人材確保と組織化を図った。まず、一八九二年に岡部次郎を日本に派遣し、組合教会と同志社で日本人伝道者の募集をおこない、⁽²²⁾ 現役の組合教会牧師奥亀太郎と、同志社の学生江上源三及び高森貞太郎を確保することに成功した。次に、同九二年、オラメル・ギューリックがハワイを訪問した際に、H E Aは彼に日本人伝道部長への就任を懇願した。⁽²³⁾ ギューリックは日本ミッション宣教師であったの

で、H E Aの依頼に応じるためには宣教師を辞任しなければならなかった。この問題をA B C F M本部と日本ミッションは簡単に解決した。両組織はハワイの日本人伝道を、日本ミッションの「出先地」(outpost)、「一種のステーション」(a sort of station)として承認したのである。⁽²⁴⁾この措置によって、ギューリックは日本宣教師の地位のままで、ハワイの伝道活動に従事することが可能になった。

彼が二一年間も勤めた日本からハワイに移る決心をした理由のひとつに、日本のクリスチャンによる宣教師批判があったことは確かである。⁽²⁵⁾彼は熊本バンドの影響の及ばないハワイでミッション付属のステーションを新設しようとした可能性すらある。⁽²⁶⁾二年後、ギューリックは一八九四年に日本人伝道部長に就任し、一九一一年まで一七年間勤めた。⁽²⁷⁾その間、日本ミッション宣教師のスカッダー(Dor-enus Scudder、一九〇三-〇七)、ゴードン(M. L. Gordon、一八九九-一九〇〇)、タルカット(E. Talcott、一九〇一-一九〇二)が伝道活動支援のためにハワイに来訪した。⁽²⁸⁾

日本人移民者数の急増に対応できるだけの日本人伝道者を確保するのは大変骨の折れることであった。ギューリックはひたすら日本ミッションを頼りにした。彼は同志社にいたデイヴィスを殊更当てにしたので、デイヴィスは日本ミッションが一九〇二年にハワイへの日本人伝道者派遣を正式に取りやめるまで、伝道者斡旋エージェントとして働いた。⁽²⁹⁾日本ミッションはギューリックがハワイに赴任

したためににわかに日本人移民伝道に関心を示すようになったわけではなく、一八八五年に「官約」移民に対してH E Aが伝道活動を開始した段階で、すでにH E Aに対する感謝の言葉と協力の意思を決議している。⁽³⁰⁾宣教師の個人的な勧誘で日本人伝道者がハワイに派遣されたケースもあった。シドニー・ギューリックやゴードンはその例である。それでも足りないので、スカッダーがホノルル滞在中に、組合教会指導者の一人である小崎弘道を招き、海外伝道者養成のための伝道学校を開校してくれるよう依頼した。小崎は霊南坂教会に東京伝道学校を開設してハワイにも卒業生を派遣した。H E Aはグリーンを介して伝道学校に財政支援をしたのであった。日本人移民伝道を巡るメソジスト派との競合が、H E AとA B C F M日本ミッションとの宣教師ネットワーク形成に影響したのである。

3 「越境」伝道

複数国家の伝道地が相互乗り入れした「場」で展開される「越境」伝道では、双方が伝道活動及びその成果を共有し合う関係が成立した。日本ミッションは日本人伝道者を提供することでH E Aのニーズに応え、⁽³¹⁾一方で、ハワイはお金を投じて伝道をして得た日本人回心者が帰国した際には、日本ミッションに引き渡すことになっていた。日本側の受け皿として、新潟のスカッダーと熊本のシドニー・ギューリックは帰国者向けの伝道活動に個別的に従事した。⁽³²⁾さ

らに日本人移民伝道はH.E.A傘下の日本人伝道部が担当していたが、同時に日本ミッシンの疑似ステーションでもあったので、伝道成果は双方にとって教勢拡大を意味した。「越境」伝道はこのように複数国家それぞれの伝道活動を担う組織双方に利益をもたらす可能性をもっていた。国家の領土内に閉じこめられた伝道地が移民によって流動化し、「脱領土化」してしまったのである。ハワイの日本人移民伝道の場合、ヨーロッパ系移民同様、大半が「出稼ぎ」移民であつたので、一八九八年にハワイの日本人移民伝道が公式には日本ミッシンの疑似ステーションで無くなったとしても、一九二四年に合衆国政府が移民法を制定して日本人移民を全面規制するまでは、「越境」伝道の成果は双方の組織が享受した可能性がある。今後の検討が期待される。

「越境」伝道に従事する宣教師は国籍上は一国家に帰属していても、政治的忠誠心は複合的な表現を取ることが多かった。宣教師の場合、アメリカ市民であり、合衆国の信徒の財政支援を得て伝道活動に従事しているので、アメリカの国益のために働くはずである。しかし、大半の宣教師は外国に長期滞在し、現地人のために働き、現地人と体験の多くを共有してきたために、複雑な政治意識を形成していた。多くの宣教師が在任した国に共感を示し、親日派や親中国派になるのは常である。元赴任国と祖国の間で政治問題が起ると宣教師はマージナルな立場に立ち、政治的忠誠心は複雑化した。日本人排斥

の機運が高まると、元日本宣教師は信仰的道義心と日本人移民への共感から、時には現地の排日を批判する言動を行った。日本人に対して真のクリスチャン像を示したいという気持ちも働いていたであろう。宣教師の親日的言動は現地の排日勢力の反感を買うことになり、宣教師は現地における疎外感から、益々日本人に肩入れするようになり、彼らの政治的忠誠心は複雑化していったのである。一八九三年にハワイ革命が起こってハワイの君主制が崩壊し、翌九四年に共和国政府が誕生した⁽³³⁾。同政府は憲法を制定してアジア人の参政権を否認し、九四年に外国人上陸拒否事件によって日本人移民を制限し、九七年には日本人移民上陸拒否事件を起こし、一方で合衆国との合併を進めることで白人支配を強化していった。オラメル・ギュリックはハワイ生まれの生粋の白人クリスチャンエリートとして、ハワイのキリスト教文明化と白人支配を願いながらも、現地社会から排斥を受ける日本人を弁護する役割を担った。この重責を果たすために、彼は共和国政府の政策やハワイの合衆国との合併を支持しつつも、日本人移民の精神的、道徳的支援者または弁護者となり、三大人種であるハワイアン、白人、日本人のキリスト教信仰による一致を目指したのである。ギュリックの姿勢は日本人教会の建設運動への対応に顕著に見られる。日本人教会が教会建設運動を本格的に始めるのは日清戦勝以降である。祖国への「遠隔地ナショナルリズム」がその動機となっていた。日本ではこの戦争が組合教会の自給

独立運動を活性化されたのである。ギューリックはハワイで日本の轍を踏みたくないのも、教会建設運動を「日本人を向上させ、キリスト教化させる」ものとして支持しつつも、H E Aが募金運動を先導することで、日本人教会自身による自給独立を食い止めようとしたのである。³⁴⁾

宣教師の伝道地での異文化体験は、彼らの文化認識をも複合的にした。アメリカの文化やキリスト教に対する絶対的確信を背景に、「明白な宿命」をもって、「異教国」日本で働いてきたわけであるから、彼らの文化的プライドは揺るぎないものになったはずである。ギューリックも、ハワイの白人キリスト教文明の維持を願っていたわけであるが、排他的な姿勢は見られない。一八九四年以降、「日本人子弟の教育問題」が日本人伝道で取り組むべき重要案件のひとつとなっていた。日本人伝道者は各地に日本人小学校を設立し、日本人児童の母国語、習慣、伝統の維持に努めた。ギューリックは小学校について、キリスト教の感化を日本語で子ども達に及ぼすことは伝道上有効であると評価した。³⁵⁾ ハワイは制度的には、一八九八年に合衆国と合併することで合衆国の準州になったわけであるが、文化的には合併の半世紀前からH E Aの宣教師の努力の結果として「アメリカ文化圏」といえるまでになっていた。日本人移民の児童がハワイに居住しながら、外国文化や外国語を学習することは、ハワイの文化統合の障害になったはずである。宣教師はすでに文化的

に複合化しているために、いわゆる伝道活動の手段として二言語・二文化学習をおこなうことに抵抗感をもたなかったのではないか。

ただ、一八九〇年代の時点では日本人移民の大半は「出稼ぎ」であり、しかもアジア人はハワイの白人支配に影響を及ぼせる地位にはなかったのも、ギューリックが「異文化」に「寛容」であったとは現段階では言い切れない。今後、日本語学校が政治問題化した一九一〇年代以降の時点での宣教師の対応について検討する必要がある。「越境」伝道は複数国家や地域内の既存の伝道活動に影響を及ぼした。日本伝道への影響としては、既述のように、日本ミッションはその伝道地域を日本国内に限定せず、ハワイにまで「脱領土化」して広げた。他伝道地のニーズに応じるだけでなく、ハワイの帰国者対象の伝道活動に着手することが、組合教会が苦手としていた地方伝道へのてこ入れとなった。

日本組合基教会への影響について考える場合、日本人伝道者のハワイへの流出は日本人のハワイへの移民だけではなく、日本国内伝道を巡る組合教会内の対立がその背景にあったことを想起する必要がある。一八七〇年代、八〇年代と二度にわたる長老派との教会合同失敗の後に「反動期」を迎え、組合教会は伸び悩んでいた。逆風を吹き飛ばすために、いつまでも「欧米風」を売り物にするのではなく、組合教会は自分達こそが近代国家建設に対して精神的に貢献している愛国者であることをアピールするストラテジーを選んだ。

そのためには、外国的なものと一線を画して、組織、財源、神学において日本産であることを日本社会に明示する必要があった。組合教会のつとめた日本ミッションからの自給独立路線はそうした日本社会へのアピール法のひとつである。一八九〇年代に入り、組合教会は宣教師の財政支援を断ち切り、自給独立を錦の御旗にして組織の引き締めを行おうとした。しかし、熊本バンドを中心とした組合教会主流派の路線は、ミッションの補助を得て伝道の充実を図ろうと地方の現場で奮闘している伝道者達から批判を受けることになった。

「見せかけ」の自給独立路線に同調できない地方伝道従事者達の中から、新たな活路を求めてハワイに渡って日本人伝道に従事する者が出てきた。⁽³⁶⁾ ハワイ伝道は組合教会主流派の自給独立、都市伝道中心の組織再編の歪みから起こったといえる面がある。主流派の路線を支持できない伝道者や信徒が組合教会を去ることは組織として痛手であったが、残った伝道者と会員が一九〇年代になって努力したために自給独立運動は進み、一八九〇年代に組合教会は教勢を拡大した。

その後、組合教会は台湾、朝鮮への植民地伝道を組織として決議したが、ハワイ伝道を決議することは一度もなかった。小崎弘道が宣教師の依頼で個人的に伝道者養成をおこなったのみである。台湾や朝鮮に赴任した伝道者数とハワイのそれとを比較すると、後者は前者を圧倒しているにも拘わらず、組織的決断の範疇外の事柄として処理された。しかし、ハワイ伝道が後の日米親善に寄与する多くの

人材やネットワークを生むことになったのは確かである。この問題については稿をあらためて論じたい。

HEAへの影響としては、日本人伝道が契機となり、HEA独占の伝道地にメソジスト派を参入させたことがある。日本人移民はハワイと日本間のABCFM宣教師ネットワーク以外に、ハワイとカリフォルニアの日本人メソジスト派間のネットワーク形成の要因となった。後者のネットワークはメソジスト派をハワイの「越境」伝道に呼び込んだのである。HEAは現地で伝道者を養成できなかったが、前者のネットワークを活用して日本ミッションから確保する方途を確立しただけでなく、その後の伝道者獲得方策をも大きく規定するものとなった。

HEAはアメリカ・キリスト教文明の最西端の城塞ハワイで「明白な宿命」を全うするために、ハワイに移民してきた「異教徒」への伝道活動を展開してきた。HEAの指導層はキリスト教界だけでなく現地の政財界を左右するエリート層でもあったので、移民への伝道は信仰的な動機付けと同時に、ハワイ経済の繁栄という彼ら自身の利害も内包していた。中国人の代替労働者としてハワイに導入された日本人移民に対しても、他の移民に対するのと同様の意図をもって伝道活動に着手した。しかし一八九〇年代になると状況が一変した。日本が日清戦争に勝利し、さらにハワイに「侵攻」する動きを示したのである。現地の指導層は軍事大国化する日本と日本人

移民とをダブらせて「脅威感」を募らせていった。ここに至って日本人への伝道活動は、白人を頂点とする既存の秩序体制やキリスト教文明を防衛する意味合いをもつようになった。この責任ある仕事を任せられるのは、宣教師を父母にもつハワイ生まれの日本宣教師ギューリック以外になかった。ハワイの指導層は、ギューリックの日本人伝道者を束ねる指導力と、彼のもつ日本の宣教師とのコネクションによる日本人伝道者確保に期待したのである。このように、「越境」伝道地では、他国で働く宣教師が自国の伝道活動を主導すること、自国の国民統合に関与するというのが起こる。

最後に、ハワイに送り込む伝道者の人選に当たって、選拔基準があったように思える。組合教会反主流派、つまり自給独立路線や宣教師排除に反対し、地方伝道に熱い思いをもつ人々がハワイに送り込まれた可能性がある。彼らなら、宣教師が伝道部長として統括するハワイの伝道地でも、宣教師と協力して伝道活動を担えるはずであった。実際、宣教師と日本人伝道者間に目立った対立や衝突が起った形跡はない。それゆえ、ハワイで日本人教会の自給伝道を試みた者は、大久保真次郎以外にはいない。熊本バンドの影響力が及ばないハワイで宣教師と日本人伝道者が協力し合う新たなステーションを作りたいというギューリックの思惑とこの人選の「隠された」方針とは合致している。今後、日本人伝道者の派遣状況を調べることによって選抜の意図は明確となろう。

むすび

日本、ハワイ間を結ぶ宣教師ネットワーク内で展開された日本人移民に対する「越境」伝道がもつ意味合いは以下の点に要約できる。

第一に、「越境」伝道は国家によって規定された伝道地を流動化、「脱領土化」するだけでなく、国家に付随する一元的な政治的、文化的忠誠心に対しても挑戦し、複合化した。

第二に、移民という「越境」行動は宣教師の「越境」伝道を再編強化した。宣教師は個人や伝道地の事情によって他の伝道地に移転することはあった。しかし、ハワイの移民伝道の場合は二つの点で新しい現象であるといえる。まず、本来の被伝道者が他国に移住したことが宣教師の移転の理由であること。次に移転地が合衆国準州であることから、外国伝道と国内伝道が相互乗り入れたことである。また、ハワイへの日本人移民は、ハワイと日本間の宣教師ネットワークを、単なる親族レベルのものから、双方の利害の一致で結ばれた強固なものに変えた。さらに、ハワイとカリフォルニアの日本人ネットワーク形成の要因となり、ハワイを複数教派のネットワークが交錯する「越境」伝道地にした。

第三に、「越境」伝道は複数国家や地域のキリスト教史や政治文化史に関与した。ハワイに対しては、多文化社会を束ねる白人指導層の「エージェント」の役割を担うH E Aの実質的影響力を日本人移

民にまで広げ、白人キリスト教文明の再編の一翼を担った。日本に対しては、組合教会の強硬な組織再編が生み出した衝撃を吸収することで、組織体制を間接的に補強した。さらに現地日本人移民への多様な教育活動によって、一八九八年以前は日布関係、それ以降は日米関係への悪影響の波及を食い止めることによって、間接的に日本政府の国益に寄与した。「越境」伝道が複数国家や地域形成に及ぼした影響については、一九〇〇年以降の展開過程を検討することで具体的な事柄が明示されることになろう。

最後に今後の研究課題として、まず、日布間の宣教師ネットワーク研究を二〇世紀にまで延長してその展開過程を考察する必要がある。二〇世紀に入り、「越境」伝道は日布ネットワークの新たな展開を導き出し、ハワイが日米関係改善、世界の人種問題解決の活動拠点になっていった。これらの壮大な課題を実行するために、合衆国本土、ハワイ、現地日本人、及び日本のキリスト教界指導層は共同プロジェクトを企画していった。次に、日本人移民伝道の宣教師ネットワークに関する比較研究である。日布間と、日本と合衆国本土間、合衆国本土と第三の転移民地間それぞれのネットワークを比較し、それらの関係性を検討する必要がある。教派間の比較、移民地と植民地の比較、日本人移民と時代を共有する他のアジア系、ヨーロッパ系、ヒスパニック系移民との比較、日本仏教との比較も検討すべき重要な課題である。最後に、海外伝道団体や宣教師による

伝道地間ネットワークの研究や、ネットワーク活動が合衆国の政治・文化形成過程に及ぼした影響の検討も今後の懸案事項となろう。

注

- (1) 「越境史」については以下のものを参照。Ian Tyrrell, "AHR Forum: American Exceptionalism in an Age of International History," *American Historical Review* (October, 1991), pp. 1031-1072; Ian Tyrrell, "Making Nations/Making States: American Historians in the Context of Empire," *Journal of American History* (December 1999), pp. 1015-1044; David Thelen, "The Nation and Beyond: Transnational Perspectives on United States History," *Journal of American History* (December 1999), pp. 965-975.

- (2) 「例外主義」とは、「共和主義」のレニプリズム、コスモポリタンの性格を指す。

- (3) いくつか例を挙げると、イタリア系移民研究では Donna R. Gabaccia, "Is Everywhere Nowhere? Nomads, Nations, and the Immigrant Paradigm of United States History," *Journal of American History* (December 1999), pp. 1115-1134, メキシコ系ディアスポラでは Carlos Gonzalez Gutierrez, "Fostering Identities: Mexico's Relations with Its Diaspora," *Journal of American History* (September 1999), pp. 545-567, フロロ・アメリカ

『キリスト教社会問題研究』三六（一九八八）、拙著『アメリカ日本人移民とキリスト教社会—カリフォルニア日本人移民の排斥・同化とE・A・ストーリー』（日本図書センター、一九九五）。

- (7) Nina Glick Schiller, Linda Basch, Cristina Blanc-Santon eds., *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered* (New York: The New York Academy of Sciences, 1992), idem, *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States* 2nd ed. (Gordon and Breach Publishers, 1995), Nina Glick Schiller, "Transmigrants and Nation-States: Something Old and Something New in the U. S.

- Immigrant Experience," in Charles Hirschman, Philip Kasinitz, Josh DeWind eds., *The Handbook of International Migration: The American Experience* (New York: Russell Sage Foundation, 1999).

- (8) 宣教師研究に「越境移民」に関わる概念を応用することについては異論があろう。「移民」のように単純労働に従事している集団と、「高度な使命感」及び「専門的な知識」をもつ宣教師集団とは同一レベルで扱えないとする意見である。しかし、こうした「移民」に対するイメージは、国家が国民統合過程の中で作り上げてきたひとつの像であり、実際の「移民」は「未熟練」労働者だけでなく、専門技術者、教師、芸術家、宗教家など多様なサブグループによって成り立っていた。さらに移民を「永住意志の有無や、滞在期間の長短を問わず、他国に自発的に移り住む行為」と定義

するならば、宣教師も広義の「移民」として捉えることができる。

- (9) 拙稿「総合化するアメリカン・ボードの伝道事業」同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究、一八六九—一八九〇』（現代史料出版、一九九

- 九）。
- (10) 拙稿「ハワイアン・ボードの初期日本人移民伝道」『キリスト教社会問題研究』三〇（一九八二）、小檜山ルイ「海外伝道と世界のアメリカ化」森孝一編著『アメリカと宗教』（日本国際問題研究所、一九九七）。
- Albertine Loomis, *To All People: A History of the Hawaii Conference of the United Church of Christ* (Honolulu: Hawaii Conference of the United Church of Christ, 1970), Mark

E. Gallagher, "No More A Christian Nation: The Protestant Church in Territorial Hawaii, 1898 - 1919" (Ph. D. Diss., History, University of Hawaii, 1983).

- (11) 茂義樹『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』（新教出版、一九八六）。尚、アメリカン・ボードの日本伝道については同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究、一八六九—一八九〇』（現代史料出版、一九九

九）参照。

- (12) 日本組合基督教教会の自給独立運動については土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』（日本基督教団出版局、一九七五）、茂義樹『日本基督教伝道会社の独立と海老名弾正』（『キリスト教社会問題研究』二四（一九七六）、塩野和夫『日本組合基督教教会史研究序説』（新教出版、一九九五）参照。

- (13) 『第八回日本組合基督教会総会記録』(一八九三年)。
- (14) 『第十回日本組合基督教会総会記録』(一八九五年)。
- (15) 『第十参回日本組合基督教会総会記録』(一八九八年)。結局、組合教会と日本ミッションが協力関係を回復してミッションからの財政支援が再開されるのは一九一九年であった。
- (16) 一九〇〇年に同志社に吸収されることになる。
- (17) ABCFM, *Annual Report* (1895)。
- (18) 北米学人「独立問題に就て」論説『基督教新聞』(一八九三年二月一日)、シドニー、ギュリキ稿「某氏といはれし宣教師の自白」寄書『基督教新聞』(一八九四年三月三〇日)。
- (19) ABCFM, *Annual Report* (1894)。熊本ステーションは二年後に再開された(ABCFM, *Annual Report*, 1896)。
- (20) 拙稿「ハワイアン・ボードの初期日本人移民伝道」。
- (21) サンフランシスコ福音会については拙稿「サンフランシスコ福音会の異文化受容教育活動」同志社大学人文科学研究所編『在米日本人社会の黎明期—『福音会沿革史料』を手がかりに』(現代史料出版、一九九七)、美山貫一のハワイ日本人移民伝道については拙稿「移民社会とキリスト教—美山貫一のハワイ日本人移民伝道」『キリスト教社会問題研究』三一(一九八三)をそれぞれ参照。
- (22) 岡部は大阪で開催の組合教会総会に出席し、「布哇は伝道師が経験を積むのに良いところである」と演説した(「大坂に於ける組合教会総会の状況(補遺)」『基督教新聞』一八九三年四月二五日)。拙稿「『会衆主義』とハワイ日本人社会—岡部次郎のハワイ日本人伝道」『キリスト教社会問題研究』三四(一九八六)、飯田耕二郎
- 「初期の日本人キリスト教伝道」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』をも参照。
- (23) 拙稿「日本ミッション『支部』としてのハワイ伝道」。
- (24) J. H. Pettie's Letter to O. H. Gulick (December 26, 1892), *The Friend* (August 1894)。拙稿「日本ミッション『支部』としてのハワイ伝道」参照。この状態はハワイと合衆国が合併する前年である一八九七年まで続いた。
- (25) O. H. Gulick's Letter to N. G. Clark (May 12, 1893)。拙稿「日本ミッション『支部』としてのハワイ伝道」参照。
- (26) O. H. Gulick's Letter to N. G. Clark (May 30, 1894)。拙稿「日本ミッション『支部』としてのハワイ伝道」参照。
- (27) Frank S. Scudder は一九〇八年、一九一二年から一三三年まで部長を「John P. Erdman は一九二四年から三四年まで部長を務めた(Board of Hawaiian Evangelical Association, *Annual Report*, 1908-1935)。
- (28) Board of Hawaiian Evangelical Association, *Annual Report*, 1899-1909。
- (29) "Report" (American Board's Japan Mission, Kyoto, Japan, July 11, 1902)。拙稿「ホノルル日本人教会の信仰表現者たち」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』参照。
- (30) 決議は「回覧状」の形式で行われた(Circular Letter, No. 171, from Jencks, April 10, 1885)。
- 「Mr. J. T. Gulick, Mr. Atkinson の要望」。
- 九百人の日本人労働者が最近、数年間の契約でハワイに渡った

ことが長期に亘る移民の始まりとなり、日本の住民がキリスト教文明の制度が移植された国へ連れて行かれて日本の異教や迷信から解放される新しい環境に置かれるので、

決議…(1) ハワイアン・ボードの諸教会に対して、日本の息子達をハワイにもたらした顕著な摂理に我々が深い関心を持っていること、ホノルルのYMCAやクリスチャンワーカーが移民を歓迎してくれたことに特別の喜びを感じていることを伝えたい。

(2) 我々は、日本ミッションの書記に、ホノルルのフォート街教会牧師兼ハワイアンボード所属の内国伝道委員であるJ.A. Cruzan宛に、我々のミッションで出版した全ての書物とトラクトのセット、新聞、楽譜無しの讃美歌一〇〇冊、楽譜付きの讃美歌三〇冊、ローマ字の讃美歌一〇冊を日本人の便宜のために送附してもらうことにする。

(3) アメリカ・トラクト協会に、書籍のセットと無料配布用のトラクトのセットを加えるように依頼する。

(4) Mr. Atkinsonに頼んでMr. Cruzanに手紙を書いて貰い、我々が日本人移民のために行い計画していること全てに関心を持っていることを知らせ、次の六月の彼等の年会でハワイアンボードに提示するこの決議のコピーを彼に渡し、日本人移民のための彼等の活動に援助になることは何でも自由に連絡してもらいたいと彼等に求めたい。

(全会一致で承認、北日本ミッションもこの票決に加わる)

(31) 一八九八年から明治学院出身者も伝道者として赴任してきた。

(32) 拙稿「ホノルル日本人教会のキリスト教表現者たち」。

(33) 竹村民郎「一九世紀末葉ハワイにおける日本人移民社会の日本回帰―多民族社会における日本人移民のアイデンティティ形成に關連して」『大阪産業大学経済論集』二二・二(二〇〇一・二)。

(34) 拙稿「日本ミッション“支部”としてのハワイ伝道」。

(35) 拙稿「日本ミッション“支部”としてのハワイ伝道」。

(36) 辻密太郎、大久保真次郎、堀貞一、福田純郷は典型例である。杉井六郎『遊行する牧者―辻密太郎の生涯』(教文館、一九八五)参照。